

今昔の峠

062 浦和実業学園中学校・高等学校

いつもの見飽きた車窓からやがて草木が揺らいでいる車窓になり、列車は小さな町にある終着のプラットホームに停まった。

ふとホームに降りた途端、待ち構えていたかのように木の箱を首からぶら下げた若い男が、弁当を乗客に売っているかのような想像ができる。

この長いプラットホームには、今はこのホームには合わない短い列車しか来ないが、およそ30年前は違う。当たり前のように長い列車がホームに止まり、この先の峠を登り降りしていた。

今は廃止になっている当区間だが、時代が止まっているかのように古びたトンネルや鉄道橋が続き、自然に溶け込んでいる信号場が数多の時間、鉄道が来ずにその時のありのままの姿を描いている。

現在、この峠はバスで越えることができるので、揺られながら峠を越え、涼しい栄えた街にやってきた。

涼しんだ後、再び見飽きた車窓に向かって、かがやいている車両は今日も峠を越えていく。



旅する人
江戸川乱歩賞
2026 出展作品